

市町村指定文化財取材票 《表》

取材日	2024年	7月	8日	(記入者) 西田 裕美	
取材参加者	石井	井本	大谷	小西	西田
	本井				
取材対象先	奈良市：観音寺の木造千手観音立像				

所在地	奈良市針町1384				
所有者(取材 対応者)名	観音寺 (取材対応)***住		連絡先 0743-82-0159		
	職(個人情報守秘)		PCアドレス		
取材申込	申込先・行政名など：観音寺 ***住職				
市町村 指定文化財	彫刻	1軀	木造千手観音立像 1970(昭和45)年3月7日旧都祁村指定 2011(平成23)年3月3日奈良市指定		
	建造物	棟	名称(指定年月日)		
文化財指定 理由	像内墨書銘により造立年と作者が明確。宿院仏師の盛期における仏像であり、南都仏教彫刻史上価値の高い仏像である。				

文化財の状況

	設備・対策・点検・通知方法など	記入者の感想
防火対策	報知器設置済みで、毎年点検を実施している。ろうそくは電気の灯りにしている。	住職が庫裡に住んで見守っており心配ない。
	被害の有無、対策など	記入者の感想
獣害対策	以前、ネズミが左目をかじったが、修理後は被害はない。	必要に応じて対応されている。
保存～継承 へ 苦勞と 今後の課題 と対策	1952(昭和27)年の修理では、左目の修理跡が目立たないよう漆を塗った。2012(平成24)年の解体修理では、寄木の継ぎ目である足首の部分が緩み体が前傾していたので、奈良市の補助を受け解体修理をした。漆の下には下塗りがあり、剥がしやすい状態で表面の漆が塗られていた。1952年の修理の際、後世の技術に託しつつ修理が行われていたことがわかる。表面の漆を剥がし再び木目が蘇った。本尊の修理と同時に本尊の厨子と脇侍の厨子の修理も行われた。こちらは全て針地域の方々の浄財によるものである。他に本堂修理、門の修理、庫裡の修理など歴代住職と針地域の方々により丁寧な維持管理がなされている。	

取材を終えて感じた文化財保護状況と今後の課題(修復、維持、管理、環境など)

都祁地域は奈良盆地に比べて標高が高く、北へ流れる木津川や西に流れる大和川の源流がある。また桜井の長谷寺に通じる道が通り、東国との往来において重要な場所であった。このような自然や地理的環境が都祁の文化の土台にあることをご住職の話から教えていただいた。寺の創建の話や「針」の地名にまつわる霊験あらたかな観音様の話を聞き、観音への深い信仰の気持ちが生じるのはもっともなことだと感じた。堂内の天井には駕籠が保管されており、葬式などの際に弔事のあった家が籠のかき手を雇って観音寺僧侶に家まで来てもらったという。針の方々の観音寺への思いが感じられた。現在のご住職は、以前長谷寺にも奉職されていたが、ご縁のあるお寺に出向くことになり、またその末寺にも関わり多忙となってやむなく長谷寺を退かれた。昨今の状況から各地で寺の跡継ぎとなって寺を継ぐことが難しい現状をお伺いし深く考えさせられた。同時にご住職が熱心に対応されていることに敬意の気持ちをもった。

市町村指定文化財取材票〈裏〉

取材日	2024年	7月	8日	(記入者) 西田 裕美	
取材参加者	石井	井本	大谷	小西	西田
	本井				
取材対象先	奈良市：観音寺の木造千手観音立像				

〈堂内写真撮影不許可〉

文化財指定名 木造千手観音立像

本尊が安置されている本堂	観音寺 階段と門
	
<p>観音寺に隣接する春日神社</p>	<p>所有社寺や地域（廃寺等）の歴史や特徴を記入</p>
	<p>寺伝によると宝亀年間、高市郡子島寺の僧延鎮が霊夢により木津川を遡って霊地を求め草堂を建て観世音像を安置したのがこの寺の始まり。その後延鎮は京都に北観音寺(清水寺)を建てた。坂上田村麻呂は清水寺を造営した際、この邑の一隠士も役夫として工事に従った。ある時、田村麻呂が射弓の会を催したところ、隠士は針頭をも射る妙技を見せ、感激した田村麻呂が「針」の邑名と「坂上」の姓を与えた。隠士は、日頃信仰する観世音の御加護であるとして、大いに堂宇を修した。その後興福寺の末寺として栄え、今も瓦に上がり藤の文様がある。隣接する春日神社では、かつて、春日大社のおん祭と同じように流鏝馬が行われていた。江戸時代に長谷寺の学僧覚雲房は観音寺の衰退を嘆き、当寺に入って教学の道場となした。1656(明暦2)年より1873(明治6)年に至る217年間に入衆した僧侶の総数は二百数十名に及ぶ。長谷寺の北門として、遠く関東から長谷寺に来る者も針の観音寺に足を留めたといわれる。境内には高さ15尺の十三重石塔があり、南面に伊行長の銘がある。(『都祁村史』、観音寺由緒書参照)</p>
<p>文化財の由緒などを記入</p>	
<p>観音寺の本尊として本堂に安置され、地域の信仰を集めている仏像。解体修理によって像内の墨書銘が明らかになり、1560(永禄3)年に空阿弥陀仏および源三郎が造立に関わったことが判明する。空阿弥陀仏は宿院仏師源次の法名と推定されている。源三郎は空阿弥陀仏の子であり、宗久とも称した。本像は、明快な顔立ち、均衡のとれた体軀、張りのある肉取り、簡潔な衣文表現など、源三郎の特長がよく表れている。像高144.7cm。(奈良市HP参照)</p> <p>檜の寄木造で、玉眼、白毫を入れている。合掌の両手と合わせて42本の手を持ち七重蓮華座上に直立している。(『奈良県総合文化調査報告書 都介野地区』参照)</p>	